

第6回

【特別対談企画】

一般社団法人 日本創造経営協会

教育事業部リーダー 清水 正年氏

企業経営の改善は、人の改善  
人の改善は、人の心と行動の改善



今回の対談は、4月6日の皇経営グループ経営セミナーの講師もしていただきました、一般社団法人 日本創造経営協会の清水正年先生をお招きいたしました。日本創造経営協会は、昭和二十三年、薄衣(うすぎ)会計事務所設立から始まり、「3代75年永続する企業」を目指し創業されました。

私は、清水先生のことを創造経営教室を通してしか存じあげておりませんが、本日は、教育を始めとして、いろいろなお考えを聞かせていただきたいと思います。



【財政再建と消費税の引き上げについて】

早速ですが、創造経営がなぜ教育、経営のコンサルティンクに入ってきたのか、その背景をお話いただきたいと思えます。

（清水）

創業者が薄衣(うすぎ)という公認会計士。薄衣が仕事を始めた戦後の混乱期は、脱税指南が会計の役目でしたが「会計とはそんなものじゃない。過去の経営をする過去会計じゃなく未来会計。本当に経営者の意思決定の役に立つような情報を提示するのが会計の使命である」と考えました。でも、あまり仕事が多かったんですね。そこにきた仕事がお客再建だったんです。お考えですか。

（清水）

今は素人なのでどうとも言えませんが、個人的な見解として、推し進めるのは難しいが、消費税が、一番政策として現実的な課税の対象なんじゃないかと思えます。

【日本の教育の根底にあるもの】

（清水）

今の日本の財政状況を家庭に置き換えれば「年間にかかる生活費が九十二万円。その中で収入が三十七万円。借金で四十四万円」という稼いでいる状況。お考えですか。

戦後の復興期に池田内閣の所得倍増計画などもありましたが、要はモノがなかった時代、大量生産大量消費。欧米に追いつけ追い越せでやってきたのが昭和の時代だったと思えます。

「欧米か！って薄衣もありますが、基本的に欧米の模倣型でやってきた。経済的な部分での合理化はそれでよかった」と思うのが問題なのは生活文化。日本が大事にしてきた伝統文化というものをなし崩しにしてきた。そういう

う土壌がなくなってきたのが、一番の問題だと考えます。そこで、私自身の家を考えてもそうなんです。祭祀に無関心になっていった。

祭祀というのは、「まつりごと」ですね。

そうですね。お墓参りをするとか、朝起きたら神棚の水と神の水をかえて手を合わせる。仏壇にごはんをお供えし、線香をあげて手を合わせる。そういう生活の一部として昔は普通にやってきたことが欧米化が進んでいく中で変わっていった。

それを一番わかりやすく言うと、今の住宅には和室が少なくなっています。

生活様式が変わっていった。宗教と、それはまた別個なんです。宗教はまた別個なんです。

本来日本人が持っている「自然への畏敬の念」とか「自然の恵みに対する感謝の気持ち」。昔は「お天道様が持っている」と太陽に向かって

手を合わせるお祈りが、たくさんいたと思うんです。

家庭から個になったことが、道徳感が薄くなってきた原因なんですかね。

そうですね、一般的に教育は、家庭教育と学校教育と社会教育の三つあると言われる中で、教育の根底をなす一番大事なものは、やっぱり家庭教育でしょう。

そう思います。昔は、言葉がよくないですが「地震・雷・火事・親父」が怖いモノの順番でしたから。

私は教育を元に戻すには、まず家庭教育からだと思います。家庭教育で儒教の精神・仏教の精神を教えていくためには、今なにをしなければなりませんか。

「3種の人間関係が大切」

「パーチャルじゃなく、リアル」

「生活改善なくして職場改善なし」

「これから経営」

「命をつなぐ」

「良き経営者」と「良き家庭をつくる」

「命をつなぐ」というフレーズは、本当にいいですね。それが人間が生きていく上での

「高い志を持って」  
生産の三要素は「人物金」ですが、経営資源として考えらるべきは「人」だと思えます。その中で「一番大事なのは、人だと思えます。資源を使うのは人なんです。清水先生は「上に行けば行くほど一番変わらなければいけないから、おまえらだけじゃダメです」と話されたんですが、これは経営者の傲慢さからきていると思えます。経営者自身の自覚を促す。一番の問題点はどこにありますか。

「命をつなぐ」  
日本は生産人口はずっと減ってきています。昨年の衣食住一人当たりの年間消費額の実績が百二十一万円。百二十一万円×人口が、今の日本の国力です。今後日本の国力は減っていく。

「これから経営」  
人口が減っていく、マーケットそのものが成熟してきている。経営の舵取りそのものが難しくなっています。これから経営者に一番大切なことを教えてください。